
女の嫉妬のかちかち山

村田やく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女の嫉妬のかちかち山

【Nコード】

N3324G

【作者名】

村田やく

【あらすじ】

かちかち山を、ちょっとだけ変えたお話です。

昔々あるところに、二人の少女がいた。

二人は幼いころから何をするにも一緒に、誰よりも仲が良かった。そんな仲良しな二人にはあだ名があった。

兎と狸。

活発なほうを兎、少し鈍臭いほうを狸と、周り呼んだ。

一見すると、なんだか不名誉なあだ名のようなだが、二人はいたく気に入り、お互いをその名で呼んでいた。

そんなある日、二人の前に、一人の男が現れた。

その男は容姿端麗なうえに聡明で、二人が惹かれるのに、それほど時間は必要なかった。二人は同時に、同じ人間に恋をしたのだ。

「抜け駆けはなし、だからね」

「うん、兎ちゃん。なし、だね」

二人はそう約束した。

それからひと月くらい経ったある日、兎は、男に肩を抱かれて幸せそうな顔で歩く、狸の姿を見かけた。

その男は、二人が恋をし、抜け駆けはなしと約束をしたはずの、あの男だった。

暫く呆然としていた兎は、思い出したように踵を返し、ふらふらと自分の家へと向かった。

数日後、兎は狸を近くの山に呼び出した。

「ねえ狸ちゃん、焚火をしない？ お芋を焼こうよ」

「うん、兎ちゃん、きつとおいしいね」

「きつとおいしいよ。それじゃあ薪を集めないかね」

二人は山の中へと入り、薪集めを始めた。

「乾いた木を集めてよ、狸ちゃん。よく、燃えるようにね」

「うん、生木は煙すごいもんね」

鈍臭い狸は時折木の根に躓きながらも、一生懸命薪を集めていた。だいぶ薪が集まった頃、兎は予め用意しておいた硬質の石を二つ、懷から取り出した。

火打石である。

そして、薪を背負う狸の後ろにまわった。

カチカチ。

「ねえ、兎ちゃん。この、カチカチって云う音はなあに？」

「それはきつと、鳥の鳴き声だよ。此処はかちかち山だから、かちかち鳥がいるんだよ」

「そうなんだ。不思議な山だね」

感心したようにそう云って、狸は薪集めを再開した。

カチカチ。

次第に、かちかち鳥の鳴き声の中に、パチパチと云う音が混じるようになっていった。

「ねえ、なんだか背中が熱いよ。ねえ、兎ちゃん？ 兎ちゃん何処？」

狸は兎を探したが、はぐれてしまったのか、兎の姿は見当たらなかった。

「熱い、熱いよ。何？ どうなってるの？ いや、熱い、熱い、熱い。熱い！」

狸はあまりの熱さに悲鳴をあげて泣きじゃくり、何度も躓きながら走り去って行った。

翌日、兎は、背中に大火傷を負った狸の見舞いに行った。

「大丈夫？ 狸ちゃん。火傷したんだって？」

「うん。とっても痛いけど、死んじやうことはないって、お医者様が云ってたよ。お見舞いに来てくれて、ありがとね」

狸はにつこりと笑って、見舞いに来た兎に対して、素直に礼を云った。

兎はさぞかし大変だろう、と云った表情を作り、提げていた風呂敷から、綺麗な壺を取り出した。

それを見た狸は、不思議そうに首を傾げた。

「兎ちゃん、それなあに？」

「これはね、火傷によく効くお薬だよ。瞬く間に治っちゃうんだって」

「わあ、すごい」

「でもね、すごく沁みるんだって。大丈夫？」

狸はにつこりと笑って、横たえていた身体を起こした。

「うん、火傷に比べたらなんてことないよ。ありがとう、兎ちゃん」

「どういたしまして。お大事にね」

そう云い残し、兎は狸の家を後にした。

兎が帰った後、その壺の中身を火傷に塗った狸は、あまりの痛み
に悲鳴をあげた。

入っていたのは、タデの汁である。

それから暫く経ち、火傷もだいぶよくなった狸を、兎は釣りに誘
った。

「湖で、お魚を釣ろうよ。それで今日の夕ご飯は、おいしいお魚だ
よ」

「うん、釣りつて、なんだか楽しそうだね」

向かった湖の岸には、二艘の舟が置いてあった。

木で作られた小さな舟と、泥で作られた、木の舟よりも一回り大
きな舟である。

「狸ちゃんは背が高いから、大きな舟に乗りなよ。わたしは小さい
から、小さい舟に乗るね」

「うん、わかったよ兎ちゃん。ありがとね」

狸は兎の言葉を、純粋な好意と受けとり、何も疑わずに大きな泥
の舟に乗りこんだ。

二艘の舟は、それぞれに沖へと出た。

しかし、時間が経つにつれ、泥でできた狸の舟は、だんだんとそ
の形を崩していった。

「う、兔ちゃん！ 舟が沈んじゃうよ！ 助けて兔ちゃん！ わたし、泳げないの」

すると、丈夫な木の舟に乗った兔は、助けを求める狸を見下ろし、冷たく云い放った。

「泳げないんだ。大変だね」

「助けて！ 兔ちゃん！」

「黙れ！」

兔は怒りを露わにした。

「この裏切り者！ 抜け駆けはなしって云ったのに！ 親友だと思つてたのに！」

「う、兔ちゃん！」

徐々に沈んでゆく舟に、狸は悲愴な表情を浮かべた。

「なんのこと！ 兔ちゃん、そんなことより助けて！」

「そんなことだと！」

兔は、手にしていた櫓を振り上げた。

「お前にとってはその程度のことなんだ！ 死ね！ 死んでしまえ！」

「やめて、やめて！ どうしたの、兔ちゃん！ お願い、やめ」
櫓で何度も叩かれた脆い泥の船は、完全にその形を崩した。

「い、いやー！ 助け、助けて！ お願い」

「死ね！」

兔の振り下ろした櫓が、今度は必死に兔へと手を伸ばす、狸を叩いた。

「や、おね、た、たすけ」

振り下ろされた櫓は、そのまま狸を水の中へと押し込んでいった。

後日、顔を恐怖と悲しみに歪ませた、哀れな狸の溺死体が見つかった。

男をとつかえひつかえしていた悪い女に、自分の男を盗られた女が復讐したのだ、と云う噂が流れた。

もちろん、噂を流したのは兎である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3324g/>

女の嫉妬のかちかち山

2010年10月8日14時35分発行